2001.7.20
週刊ポスト

「ケータイ・PHS」を利用して「浮気調査」もできる

「最新盗聴器&テク」で会話はあなたの筒抜けだ

IT最前線——探索第7回

いまや日本は〈盗聴天国〉といっていい。かつて探偵や産業スパイの秘密兵器だった小型盗聴器は、秋葉原の電気街などでわずか数万円で手に入る。本誌は某省庁の大臣室で起こった盗聴事件を別掲記事で報しているが、会社でも自宅でも、気づかないうちに自分の会話が聞かれている危険は常にあると思っていないと、人生を踏み外すことさえある。

＊

個人による盗聴が最もはびこるのがラブホテル街だ。

最新の盗聴器は、単3乾電池2本がすっぽり収まる程度の大きさで、高感度マイクで拾った音声を数時間にわたって半径100㍍くらいまで発信することができる。値段はだいたい2万～3万円程度が多く、電波を受信する無線機とセットでも5万円前後で売られている。無線機専門店やラジオ部品などを扱うショップに行けば、特に用途を尋ねられることもなく誰でも買うことができる。

そうした盗聴器をホテルのテレビ台の中やベッドの裏などに設置し、外から受信機で部屋の中の様子をうかがうマニアが跡を絶たない。電池切れになった盗聴器は、設置した者が再び同じ部屋を利用した際に回収していくことが多いとされるが、それでも受信機を持ってラブホテル街を歩くと、次々と〝怪しい電波〟を受信できるのが現状で、どれだけ多くの盗聴器が設置されているかがわかる。

さらに、電話盗聴用にはモジュラージャック型の盗聴器も広く出回っている。これは一見すると電話機と電話回線をつなぐ配線の一部にしか見えないが、この機械で電話の会話を盗み取り、やはり外部の受信機に向けて電波を発信する仕組みだ。盗聴したい相手の電話に近づくことさえできれば簡単に設置でき、見つかる心配はまずない。

そうした進化を続ける盗聴器の中でも、最近特に注目されているのが、携帯電話やPHSを簡単に高性能盗聴器にしてしまう特殊マイクだ。

この商品は約1年前くらいから出回っているが、大きさはマッチ箱程度で、電話機のイヤホン・ジャックに接続するだけで装置は完成だ。これを盗聴したい相手の家や持ち物の中に忍ばせるのだが、画期的なのは、従来の盗聴器では発信される電波を近くで受信しなければならなかったものが、電話機を利用することで、いつ、どこからでも、その電話にかけることで盗聴が可能になったことだ。普通の携帯電話を自動着信設定にしただけのことだが、内蔵マイクでは相手の会話までは聞こえないものが、この携帯用マイクは、カバンなどに隠していても半径10㍍程度の会話を鮮明に拾うことができる。

携帯用マイクの登場は、盗聴を一部のマニアのものではなくしてしまった。従来のシステムでは、盗聴器の近くに隠れていなければならないから、どんなに機器が発達したとしても、ある程度の根気とリスクを負わなければならなかった。が、携帯用マイクはそんな心配はない。

実は、このマイクが一番利用されているのは浮気チェックなのだという。

総合調査会社の日本調査情報センターでは、このマイクを装着した電話機を1日5000円で貸し出しを始めたところ、女性を中心に申し込みが殺到したという。

「調査員が浮気調査をする場合、1日で仕事が済んでも費用は10万円くらいかかる。若い人には負担が大きいし、プライバシーに関わることだから自分で調べたいという要望も多いのです。利用者は25～30歳の未婚の女性が最も多く、相手の部屋のタンスの裏に隠したり、ぬいぐるみの中に入れて相手に渡す、車の中に仕掛けるなどの使い方をされているようです」（代表取締役・中村賢氏）

しかも、PHSの中には、どこのアンテナ基地と通信しているかで電話機の所在を調べる機能を備えたものもあり、これと組み合わせれば、探偵を雇わなくても行動を追跡することもできる。

最近では盗聴被害が身近になっているため、盗聴器が仕掛けられていないかを調べる専門業者が活躍しているが、そうした業者が使う盗聴器発見器は、盗聴器が発する電波を検知するシステムで、この携帯用マイクを使った盗聴器を使った場合は発見することはほぼ不可能なのだという。

「レーザー盗聴器」まで登場

オフィスにも盗聴器はゾロゾロあると思っていた方が賢明だ。ある盗聴器検知業者によると、今では定期的に調査を依頼してくる大企業も多く、盗聴器が見つかるのは珍しくないという。

そうした調査は、たいていなら自分で調べたいという要望も多いのです。利用者は25～30歳の未婚の女性が最も多く、相手の部屋のタンスの裏に隠したり、ぬいぐるみの中に入れて相手に渡す、車の中に仕掛けるなどの使い方をされているようです」（代表取締役・中村賢氏）

しかも、PHSの中には、どこのアンテナ基地と通信しているかで電話機の所在を調べる機能を備えたものもあり、これと組み合わせれば、探偵を雇わなくても行動を追跡することもできる。

最近では盗聴被害が身近になっているため、盗聴器が仕掛けられていないかを調べる専門業者が活躍しているが、そうした業者が使う盗聴器発見器は、盗聴器が発する電波を検知するシステムで、この携帯用マイクを使った盗聴器を使った場合は発見することはほぼ不可能なのだという。

カバンにしのばせておくだけで一日中会話を盗聴（右側写真は電波式の盗聴器と受信機、モジュラージャック型盗聴器）

イラスト／渡辺晋也

一般社員の目に触れない週末や深夜に行なうため、担当部署の社員を除けば、自分の会社から盗聴器が発見されたことを知らないまま無防備に仕事を続けているビジネスマンは非常に多いことになる。

社内の派閥抗争やライバル社による情報収集などオフィス盗聴の理由は様々だが、ここでもやはり携帯用マイクが〝最大の武器〟になっている。

ある大手建設会社では、これを撃退するために会議室や役員室向けに携帯電話の電波をカットする特殊な窓ガラスやシートを販売しているが、そこまで気を配らなければ社内の秘密さえ守られない時代になっている。

もっとも、そうした企業レベルの盗聴情報は、時に数千万円、数億円の価値を持つこともあるため、盗聴する側と防ぐ側のイタチごっこに終わりはない。最近、大手の興信所では、かつて冷戦時代に超大国の諜報機関が使用していた『レーザー盗聴器』を導入したという。最大300㍍も離れた場所から、盗聴したい部屋の窓にレーザーを照射するだけで、ガラスの微妙な振動を測定して中の会話内容がわかるのだという。価格は1000万円ともいわれる。

日本がこれほどの盗聴天国になっている最大の理由は、情報を盗むことに対する法的な規制がないからだ。盗聴をしても、せいぜい電波法違反や住居侵入など軽微な犯罪に問われるにすぎない。

盗聴事情に詳しい『月刊ラジオライフ』の関口岳彦（たけひこ）編集長は、そうした法整備を急ぐべきだと指摘した上で、こう語る。

「盗聴器そのものはただの機械です。使い方次第で益にもなるし害にもなる。例えば、企業が悪質なクレーマーとの会話を録音したり、いじめを隠している子供に親が盗聴器を持たせて発見した例などもある。いたずらや犯罪をきちんと取り締まることで、盗聴行為や盗聴器すべてが悪だと見られることもなくなり、有益な利用方法も広まると思います」

今はまだ、社会の意識や法体系が盗聴技術の発達に追いついていないということか。